

10年目からの出発

東日本大震災から2週間後、私は手にできた数冊の絵本とともに避難所の体育館に入っていました。途端に「あつ、ころりんが来た」バタバタと足音を響かせて子どもたちが集まってきました。不安・安堵・悲しみ・期待、様々な感情が入り混じり、どの子どもすらいつくような眼差しでした。

促されて寒い避難所の一角で、読み聞かせお話を始めました。すると一冊読み終える毎に、子どもたちはその本の面白さについて口々に語り始めたのでした。それから「もつと読んで」の連続。子ども一人ひとりの顔を見ているうちに、熱いものがこみ上げてきました。そして、地域の子どもや子どももの周りにいる人たちに対し、できる限りの力を尽くそうと心に決めました。

まず、避難所での巡回おはなし会、そして絵本を届ける移動図書館事業、高齢者が子どもへの読み聞かせを試みる事業、地域の民

話を題材に中高生とともに紙芝居を手作りして郷土愛を育む活動、地域交流図書室「おはなしサロン」や市交流施設の管理・運営等々、9年に渡る復興支援活動はいずれも本の力を届ける企画から展開したものでした。

◇ ◇ ◇
子どもは本を入口にして、そこに繰り返し広げられる物語の世界の楽しさを知っています。無限に広がる魅力的な世界で、心を解放して縦横無尽に飛び回って遊びます。そこで、勇気や希望や夢をかなえて力を得ます。もともと子ども心の奥に備わっている生命力が物語の世界を疑似体験することで立ち上がってくる感じです。

この本の楽しみというものは、国を越えて共通します。国際NGOや企業の協力により、大船渡市の子どもたち200人が毎年絵本を200冊作り、東南アジアに届けるという活動を8年間続けてきました。その間、自分で



特定非営利活動法人
おはなしころりん 理事長
(けせん女志会 幹事)
(大船渡市)

江刺 由紀子

も届け先を訪問し、現地の子どもたちがどんなに喜んでいるかを見聞きし、情報を持ち帰り大船渡市の子どもたちに伝えていきます。カンボジアのスラムでの学習環境、国境山岳地帯のミャンマー難民キャンプの生活状況、そして、届けた絵本の役割は何かということ。会ったことがなくても友達。同じ地球上で同じ時代を生きる友達。絵本の楽しさを知る子ども同士が絵本でつながるこの活動は、明るい未来を照らす光であると考えます。

◇ ◇ ◇
東日本大震災から9年が経過し、今年は10年目に入り一つの区切りを迎えます。今後とも本や交流への取り組みは続けていきます。これから先も地域の課題は山積みで、人口減少と少子高齢化は深刻の一途をたどっています。行政も私たち住民も様々な対応策に苦慮しているところですが、顕著な成果は出にくいのが現状です。



サロンお話会での読み聞かせ



子育て支援活動



けせん女志会メンバーと

にもかかわらず心強いのは、「この地域で暮らす人間として何もしないという選択肢はない」と断言する住民があちこちにいるという事です。そういう住民の後押しをし、活躍の場を設け、やり遂げる素晴らしさの体験を重ね、自主的な活動につなげていくことが重要です。大きな課題に直結しなくても、小さな身近な困りごとに自ら取り組もうとする人材を増やすことで、最終的には大きな課題への解決に近づけると思っています。

地域をより良く元気にしていこうとする住民の継続的で柔軟な働きかけが、微妙に変化し続ける課題への解決策になります。その結果、災害に強く安全で安心な地域社会が維持されると考えます。そのためのためゆまない働きかけを続ける質と意識の高い人材が今後ますます求められます。地域の特性を考えると、

その人材とはおそらく、絶大な影響力を持つ極少数のリーダーではなく、小さいが数多くのリーダーが育ち連携しあって大きなうねりをつくり、時流に即した取り組みを行うというやり方が合っていると思っています。

◇ ◇ ◇
そこで、3年前、女性リーダーとなり得る経営者仲間が数人集い、「けせん女志会」という任意団体を立ち上げました。気軽に楽しい女性同士のつながりのなかで、「交流の場」「共に学ぶ場」「自分を磨く場」「チャレンジの場」という4つのコンセプトを掲げています。職種も年齢も様々ですが、女性という共通項を持つ当団体はときに絶大なパワーを発揮します。

今年度は「けせん女志会フェス2019」の開催に挑み、おおふなぼーと（大船渡市防災観光交流センター）をかつてない賑わいで沸か

せ、内外にアピールすることに成功しました。女性目線での地域の魅力発信、多くの住民の巻き込みによる地域活性化、女性リーダーの育成、社会参画への意識向上等々を目指しながら、「このまちはもっと楽しくなる」という思いを作っていくこと自体が楽しいと感じています。それぞれの女性起業者の思いと行いを尊重し、お互いに応援し合う関係性を大事にしたい考えです。

◇ ◇ ◇
今、振り返って思い出すのは、仮設住宅団地で出会った高齢男性の言葉と眼差し。それは1年目のある冬の日でした。男性は私たちが活動で訪問した集会所には入らず、雪の降る外を不自由な体で歩いていました。私が外に出て声をかけると近づいてきて、こちらを見据えて言いました。「自分もこの地域のために何かしたい。役立ちたい。しかし、すっかり年をとってしまった。体も動かないから何もできない。だから、あなたにはがんばってほしい」。冷たい風に消えそうな小さく弱い声だったのを覚えています。

過去、沿岸地域は繰り返し津波被害で辛い思いをしてきました。そして、その度に先人たちは「より良い地域を」と、まちを作り直してきました。今回は私たちの番。次世代にちゃんと手渡すために、地域の大人である私たちがその精神を絶やさずに、活気あるまちを創っていくのです。東日本大震災発災10年目からのスタートです。